

笑う名波先生

佐藤 憲一

総合文学領域の学生たちの関心は実にさまざまだ。古代ギリシアから韓流ドラマまで、古今東西、幅広い。そんな学生たちをつなぎとめるものが何かあるとすれば、それは理論である。たとえば、ポストコロニアルという理論のもとでは、初期近代のイングランド演劇も、コンラッドの小説も、サルトルの文学論も、中野重治の作品も、満洲文学も、岡崎京子のマンガも、論じることができる（おそらく）。それぞれの関心はばらばらでも、理論に対する興味は共有している。この意味で、理論は総合文学の学生たちをつなげる鍵である。

名波先生は研究室にいらっしやると、たいていご自身で冗談を言われ、「わはははははははは」と高笑いされる。この高笑いのせいで、初期近代イングランド演劇をやっている学生から岡崎京子のマンガをやっている学生まで、皆が等しく笑う。それまでしかめ面で論文を読んでいた学生も、コンピューターに向かって締め切り間近の論文を書いていた学生も、みな誘われて笑う。先生の笑いにはそのような力がある。批評理論が学生たちをつなぐように、名波先生の笑いもまた、学生をつなぐ。批評理論と名波先生の笑いとは、ともすれば各人の興味に従って瓦解しかねない総合文学研究室の一体感を維持するために、長らく欠かせないふたつの要素であった。少なくとも私がこの研究室に所属した7年間に関しては、そうであったと断言できる。

名波先生は流暢な江戸弁でお話される。話の切り出し方が絶妙で、その後が続く話のテンポも爽快。冗談へとつなげる前フリも完璧だ。そして冗談のあとには、絶妙の間で高笑いがかかる。まるで質の高い噺家の演ずる落語を聴いているようで、気持ちが良い。そんな名波先生が、笑いや滑稽とは正反対の「怪奇」に造詣が深くていらっしやるのは、一見するとなんだか奇妙に見えなくもない。しかし、怪奇と滑稽とは名波先生の中で明確に連環しているに違いない。笑いや滑稽を極限まで突き詰めれば奇なるものにたどり着き、奇なるものを極限まで突き詰めれば笑いや滑稽にたどり着く。名波先生は「わはははは」と豪快に笑いながら、安易な二項対立の発想をやすやすと乗り越えて行かれるのだと思う。そうすることで名波先生は「相反するものの合一」を、身をもって私たち学生に示されているのだ。

11月も下旬になると、総合文学研究室に集中暖房が入る。昔に比べて今は3倍ほど広くなった研究室ではあるが、この暖房のせいでひどく暑くなり、私は半そでの

Tシャツ1枚で論文を書いている。そこにふと、名波先生が入ってこられる。「おい、佐藤君、な～んで格好しているんだよまったく、もう冬だぜ、元気いいな、わははははは」。いつもの名波先生だ。周りの学生たちもつられて、笑う。張り詰めた空気が、一瞬緩む。その2日後。研究室のある建物の下で、名波先生にばったり出くわす。私は分厚いジャケットを着ている。「佐藤君、さすがに今日は半そでじゃあねえな、わはははははは」。いつもの名波先生。きっとこれから「らんぷ」に行って静かにコーヒーを飲まれるのだろう。

総合文学の誰もが慣れ親しんできた、名波先生のいる風景。口惜しいことに、4月からはこれが日常ではなくなってしまう。でも学生たちは待っています。「らんぷ」にコーヒーを飲みにいっしょのついでに、研究室に笑いにいっしょの先生を。名波先生、長い間ありがとうございました。